

『引揚げ文学論序説』を受け止める

帝国崩壊と戦後日本のなかの「帝国経験」

蘭 信三

はじめに

上智大学の^{あららぎ}蘭 信三と申します。本書のような比較文学の本を評するには専門も異なり、力も不足していますので、不十分な点が多々あると思いますが、どうかご容赦ください。

まず、朴裕河さんとの関係を簡単に紹介します。朴裕河さんに初めてお目にかかったのは2012年3月末の早稲田大学で開催された沖縄国際シンポジウムでした。その後、その年の夏に上智大学で「東アジア歴史和解の可能性をさぐる－帝国と冷戦を超えて」というとても刺激的な講演を行ってもらい、それを上智大学大学院国際関係論専攻『コスモポリス』第7号（2013年3月）に特別寄稿していただきました。『和解のために』（2006年）や『帝国の慰安婦』（2014年）という御本からだけでなく、直接・間接に様々な学ばせていただいていますし、それに科学研究費の共同研究にもお誘いし、参加してもらっているといった関係です。

今回は、朴裕河さんの『引揚げ文学論序説』を受け取りしばらく没入しましたが、引揚げ文学を最初にタイトルとした素晴らしい本として大変感銘深く拝読しました。同時に、「引揚げ」というのが朴裕河さんと私の共通のテーマですが、引揚げを研究するものとして打ちのめされましたし、様々なことに思いをめぐらしました。この本を読んでいて、感動して、共感して、センチメンタルになって、どんどん本書のなかに惹きこまれていきました。今日の報告もきちんとできるかどうか、ちょっと自信ないのですけれども。

1. 満洲引揚げ者研究との出会い

まずは、自己紹介をかねて、自分の研究に至るまでの経緯を簡単に紹介します。

私は、満洲から引揚げてきた日本人や、中国に残留した日本人の研究をしています。その研究はある偶然から始まりました。それは私の指導教官の中久郎先生（京都大学文学研究科社会学教室教授）からの示唆でした。中先生は、かつて「満洲国」（以下、括弧略）の建国大学の学生だったこと、満洲国での敗戦体験が非常に大きな経験となったこと、そして満洲へは多くの農民が開拓民（満州移民）として渡ったが、敗戦後は大変な目に遭いほうほうの体で引揚げてきたこと等話をされ、当時日本国内の農村研究を始めていた私に、この満洲の開拓移民のことを研究してみませんか、と示唆されました。青天の霹靂といえますか、まったく予期しない話に驚きましたが、それが私のこの研究へのいざないとなりました。

先生との約束を果たすために約半年ほど資料を探したり、数人の満洲関係者に聞き取りをしたりしましたが、ある時に転機がきました。ある本を見つけ、そこに所収されていた手記に関

心を持ち、その方に連絡し、お宅を訪問することになりました。忘れもしません、1984年8月10日です。その日、私は熊本の菊池平野のある大きな農家を訪ね、終戦直後の1946年に満洲から引揚げてきたという老夫婦に4時間にわたる長い聞き取りをしました。その夫婦の語った引揚げ体験にも驚愕しましたが、自宅に帰って、妻にその話を紹介する際に言葉にはならない感情がいきなり混じって、大泣きをしてしまいました。しかし私は、「帝国主義の尖兵」として満洲に渡り、中国侵略のお先棒を担いだ人たち、その彼らが敗戦から引揚げで様々な苦難に出会ったという引揚げの物語に泣いてしまっている自分はいったい何者なんだろうか、ということにこだわり、引揚げの物語に泣いた自分が理念的に許せなくて、繰り返し考えていくなかでこのテーマにはまっていきました¹⁾。

2. 中久郎先生の満洲経験

私をこの研究にいざなった中久郎先生もまた満洲引揚げの経験が大きかったと言います。中先生は満洲国立建国大学の第八期生でした。彼は、ここ京都の北野神社の関係者だったんですけども、親の代に没落し、自分が家を再興したいということで、「青雲の志」をもって、終戦まじかの1945年3月に満洲に渡りました。しかし、建国大学での授業や寮生活に馴染む間もなく敗戦、そして「国が崩壊」する過程を目の当たりにし、そのことが大きなトラウマとなります。「五族協和」という理想を目指した建国大学での中国人学生との交流を信じながらも、その実際の姿を知り、偽満としての満洲国の実態を知り、戦後の彼は、その満洲での経験を引きずって生きてきたんです。

彼は有名なデュルケム研究者でしたが、何で自分がデュルケムを研究しているかという、基本的には秩序問題がその根底にあるというのでした。社会的な秩序こそが社会の根底にあるということはずっと言っていました²⁾。なぜ彼が秩序問題にこだわるのかという、それは満洲での敗戦を迎えた経験であり、引揚げの経験だというのでした。

1945年8月15日前後から満洲がどんどん不穏になっていって（日本人から見たらですね）、秩序が崩れていく。その中で、自分たちは生きていくため、生活の糧を得るために、屋台をひきながら商売をして生き延びたんだと。商売のために、ソ連兵相手に歌も歌ったこともあったんだと。満洲国の秩序が崩壊していくプロセスを見ていた自分、しかし、その後になんか秩序づけられていった過程を見たことが自分の研究の根幹にあるのだ、と語りました。

しかし、この体験の概略を社会学的な文脈では話しても、満洲での子細な出来事を引揚げの文脈でもって公の前で話をするにはほとんどなかったですね。なぜなら、彼は満洲国に係わった自分の過去を封印し、身近な人以外にはまったく話さなかったのです。いわんや学生にはそんなことについては一言も語りませんでした。1983年4月に、私は大学院を中退し熊本大学に就職しましたが、その頃にこの話を聞きました。なぜか私は先生に親近感を持ってもらっていましたし、就職し、学生でなくなった私を前にしてつい先生の気が緩んで、話されたのでしょうか。彼は、満洲で国が崩壊する過程を経験し、ずっとその経験を引きずって生きてきたんだと。そして、それが戦後の研究者としての人生をも方向づけたというのです。

私が満洲移民の研究を始め、その研究の進展や詳細を報告し話すようになると、彼は私に満

洲の話をどんどん語りだしました。私という「聞き手」をえて、彼は語るうちに様々のことを思い出していきました。ある時は、京大そばの百万遍の喫茶店で話をしていた、いきなり興奮し、コーヒー飲みながら興奮して、ちょっと大きい声で話をしたりなんかするんですね。いつも冷静で抑制的な方でしたが、自分をコントロールできないようなことが何回かありました。それはもうびっくりしました³⁾。

3. 「復員兵の子／引揚者の子」として育った戦後生まれ

このように中先生のアドバイスと満洲引揚者／中国残留婦人との出会いが決定的なきっかけとなって満洲引揚者／中国残留者の研究を始めましたが、その前提として私が「復員兵の子」であったことも大きな要素でした。

満洲引揚者や中国に残留した日本人を研究していく過程で、私は自分が復員兵の子であることを強く意識するようになりました。私の父親は九州の佐賀県で百姓の二男として、1917年8月に生まれました。1937年7月の日中戦争勃発後に徴兵検査に合格、志願し、1946年に復員してきました。中国戦線を主に10年近くも戦地におり、七階級「出世」した古参兵でした。彼は士官としてではなく、兵隊として、そして長く下士官として前線に配属され、日本陸軍の戦場体験のエッセンスを経験した人間だったようです。彼は良くも悪くも「軍隊で人が変わり」、骨の髄まで軍隊生活が染みついていた、今から振り返れば。いわば「軍隊の規律規範が身体化」されていました。たとえば、朝6時に起き、定時に朝食を食べ、仕事を始め、夜10時半には寝るという判をついたような生活で、決してリズムを崩しませんでした。私が大学進学で家を離れるまで、この生活は繰り返されていました。

その生活のなかで、彼のスパルタ的な教育によって、彼の軍隊生活の規律規範が私たち子どもにも身体化されていったのです。「文武両道に秀でよ」と育てられた私の根底には、彼の戦場体験によって得られたものが刷り込まれていたのです。そのことが、この研究をやるにつれてわかっていきました。父の戦場体験の刷り込みが、満洲引揚者の戦後生活への私の「共感」をもたらしていききましたが、逆にそのことへの否定的価値観という内的な矛盾が、私の研究の原動力へとなっていったのです。

朴裕河さんの本の中で「植民地的身体」という言葉が出てきます。この言葉を読んだときには衝撃を受けました。先ほど述べたことをぴたりと言い当てられた、と思いました。満洲引揚者の人たちに話を聞いていくなかで、私は、「彼らへの共感」がどんどん自分の「身体」のなかで目覚めていくんですね。そしてその過程で、それまでは何かわからなかったこと、たとえば、なぜ私はこういう生き方をするのか、何で私は、学生時代柔道やっていたんですけれども、何で私は柔道が強いのだろうか、それはわからなかったんですね。それは、やっぱり父親の軍隊、戦場での経験だったんだということが次第にわかってきました。復員兵の子どもであるということが、何と自分のなかにこれだけ強く刻印されているんだということに気づかされていきました。これは「植民地的身体」とは違って「軍隊化された身体」いうのでしょうか。「植民地的身体」という言葉、これはとっても含意のある言葉だと思いました。

ところが、それは私だけではなかったのです。ちょうど私の同世代の同僚の人がいまして、

彼も、じつはお母さんが引揚者だったのです。それで、たまたま私がこの朴裕河さんの本のことを紹介し、自分の話をしましたら、彼も驚いた様子でした。彼と私はある博士課程の学生と一緒に指導しているのですが、そして、たまたまその学生の研究テーマが「朝鮮戦争に従軍した日系アメリカ人兵士の経験」を研究対象としています。その学生の話をしていくなかで、私は自分の父親の話をしていきました。そしたら、その翌日に、その学生の口頭試問の後に、じつは自分の母親が朝鮮引揚者で、自分があの家族に反抗していたことの原因がよくわかったと言うのです。これまでは、若い時にただ単に反抗していただけだと思っていたけれども、じつは、引揚者家族の雰囲気に対して反抗していたんだろう、ということ語ってくれました。自分のおじさんは高名なひとだが、あの一族の持っている生き方というものに対して反発をしていたのだと、「引揚者家族という補助線を引いたことでよりわかったような気がする」と。

もうひとつ別のエピソードを紹介します。私は2016年12月4日に、上坪隆の『水子の譜』(RKB毎日放送, 1977年)と、佐々木聡の『奥底の悲しみ』(山口放送, 2015年)というドキュメンタリー2本を同時に上映し、それを題材としたシンポジウムを主催しました。そのときに参加していた別の同僚が、翌日に長文のメールを送ってきたんですね。びっくりしました。その同僚は、自分の家族も満洲と関係のある家族なんだと、自分が何でこんな雰囲気の家で育ってきたのかということが、このシンポジウムでわかったような気がする。その同僚は高度成長期後半の生まれなんです。戦後生まれのなかには、じつは復員兵であるとか引揚者であるとか、そういう人たちの体験や経験がその子どもたちに刻印されてきているのだと、改めて痛感しました。

4. 「引揚者二世」というインパクト

▲「引揚者二世」という経験

朴裕河さんは「引揚者二世」というのが一番大きなポイントだということを本書で言われています。先ほどの戦後生まれ世代は二世ではないですが、そのなかにもやっぱり引揚げ体験や戦場体験、これがかなり刻印されてきている。じゃ、一体、引揚げてきた少年たちはどれほどの影響を与えられたのか、ということなんですね。

私は、本書を読んでいくなかで、もう本当に何かエモーショナルな感情になっていって、本書に入り込んでしまいました。特に、後藤明生の『夢かたり』のこの「植民地的身体」の戦後の日々というのは、ちょっと耐えられないくらいの思いを抱きながら、はいり込みました。読んでしまったというか、読んで耐えられないんですね。自分の中の何かあるものと共鳴していくというか、共振していく。だから、きょうも、ここでこの話をしていくときに、自分が平静に話せるかというのは、とても自信なかったんですけども。

▲引揚げはなぜ国民の物語にならなかったか

それで、あと見ていきますとね、何がおもしろかったかという、「引揚げ」はなぜ国民の物語にならなかったのか(25頁)という問いですね。これ、じつは2016年11月に福岡で『博多港引揚げ70周年記念シンポジウム 博多港をめぐる引揚・送還を再考するということ』という企画をやったのですが、この時に私はもう自分の見方を話しました⁴⁾。後で時間があったら話

しますが。

▲支配と恐怖、暴力と交通、引揚げ文学の不在

また「支配と恐怖」(121～124頁)、これもよくわかりますね。どう言ったらいいんでしょうか、その支配が、こう支配しているんだけれども、ある瞬間に、何か抵抗、あるいは反抗というのが出てくる。それをどういうふうに分の中で処理していいのかわからないという。ある種の、支配しているがゆえに感じる恐怖という、その側面を掬い上げたのはものすごくおもしろかったですね。

あと、植民地出身者の活躍、戦後文学のなかの「引揚げ文学」の不在(36頁)、定住者と引揚者(38頁)、想像される内地というのがありますがけれども。このあたりも、とてもおもしろかったですけれども、ちょっと時間がありませんから次へ行きます⁵⁾。

5. 引揚げをめぐる多様な視点

▲強制送還としての「引揚げ」

「引揚げなのか、追放なのか」ということが「強制送還」という言葉を介して論じられますが、これも興味深い論点でした(51頁)。じつは、もう朴裕河さんもお存じのように、私たちは引揚げの国際比較研究というのをやっています。そこでは、日本・東アジアでは「引揚げ」と言いますが、ドイツでは「追放」といい、フランスでは「引揚げ」というように、それぞれ違っていて、「引揚げ」というものに対しては様々なバリエーションがありますし、それぞれの文脈が異なってもいます。しかし、この引揚げ、日本人の引揚げ自体に関しても、これは当事者からしたら「強制送還」だったのではないかというふうなことも、例えば本書では日野啓三の文章が引用されています(51頁)、五木寛之もまた書評のなかでこの言葉に注目していますね⁶⁾。引揚者たちは、とくに植民地で育ったり生まれた二世たちは、自分たちは帰りたくなかったんだという気持ちが「強制送還」という言葉に象徴されていますね。

それに、今から考えると敗戦後は結果としてほぼ全員が引揚げてきますが、敗戦当時は朝鮮に残っていた人たちが多かったですし、またもう一度戻っていけるんじゃないかと思っていました。そして、植民地の人たちもまた、日本軍は強いからまた戻ってくるに違いない、というふうに思っていた人たちもいたと言われたりしていました。

だから、この引揚げというのは、今から見ると既定の出来事なんですけど、その当時の段階においては、非常にあいまいな状況で引揚げてきた人たちが多く、引揚げも送還も永続的なものではなく、一時的なものかもしれない、という希望的な想いが錯綜していたようでした。錯綜する引揚者たちの想い、そして敗戦で混乱し、植民地の混乱をおおよそは知っているが他人ごとだと思っていた内地社会が、引揚者たちを受け入れていくわけです。何かよくわからないうちに引揚げてしまった、というようなところが書かれてありますが、その辺が本書のなかでじつに巧みに描かれていっている。そこを読んで、私もいろんな引揚者の話をこれまで聞いてきたんですけども、ある箇所では誰それさんの話を思い浮かべたり、別の箇所では別の人の話を思う浮かべながら、本書を読んでいくということもありました。

▲植民地二世をクローズアップする意味

そのなかでも、先ほど言いましたように、植民地生まれの子どもたちへ着目したこと、これは、朴裕河さんの真骨頂だと思いましたね。一世ではなくて二世の経験の話ですね。もちろん、一世の経験はそれはそれで何だったのかという問題意識もあるでしょうし、これはこれでおもしろい側面があると思います。しかし、そこを朴裕河さんはあえて二世の引揚げ経験を選んだのですね。一世はね、例えば、満洲文学の中で活躍していた人（たとえば牛島春子など）もいたと思いますね。一世たちが、引揚げ後、じゃ、どうしたのか、どう転向したのか、しなかったのかという点も、課題としてあると思います。しかし、それではなくて引揚げ二世の話をクリックアップする。それが本書の中核になるのですね。

これは、植民地生まれの人たちというのは、「植民地は所与」のものとして育っている。植民地に行って、その中でやしあがっていく一世の日本人ではなく、ある種つくられていった秩序のなかで、植民地の人としてではなく、内地出身の宗主国の人間として生まれ育っている。そのなかで、植民地意識も学習するし、「外地日本語」といいますか、植民地での日本語も学習するし、植民地の風景も「自然」としてあるし、いわばそういうもろもろを併せ持った「植民地的身体」というものを獲得していくということなのですね。これが、とっても大きなポイントなのかな、と思います。

また、朴裕河さんは『水子の譜』を挙げて、それを説明されていますが、先ほど述べましたように、2015年に山口放送がつくった『奥底の悲しみ』というドキュメンタリーと1977年にRKB毎日放送がつくった『水子の譜』を、2016年12月4日に上智で同時上演会をしました。この二本の違いは、1977年につくられた『水子の譜』は、引揚げ関係者や医療関係者、しかも大人の関係者に直接聞いています。ところが、30年後の『奥底の悲しみ』では、性暴力を受けた女性の子どもたち、被害者の子どもたちに聞いているんですね。そういう意味で、これは植民地二世の物語になってきます。これを一度見て、朴裕河さん、ぜひこれに関して論評してほしいなと思いますね。ものすごく、僕は聞いていて、何といいますかね、この『奥底の悲しみ』のなかに出てくる母親が性暴力を受けて、そのことで夫婦関係がどうなっていくのか、それをずっと見ている子どもたちがいるわけですね。そのことが、とても重要な意味を持っているんじゃないかなと思うんです。

それは、引揚者二世が植民地文学を書いていきますが、文学者は文学という媒体をもって書ける。だけど、普通の人たちは書くことはできない。したがって、彼ら彼女らは語ることしかできないということになりますね。では、そのような語りをどう聞き取っていくのかということが一つのポイントになると思うんです。

▲戦後体験の重要さ

ついで、朴裕河さんのもう一つのポイントは、引揚げ体験のみでなくて、戦後体験を対象としているということですね。これは非常に重要だと思います。この点は、本書のなかでも「異郷への強制送還」(51頁)に代表されるように、多くの文学作品のなかの主要なトピックとなっており、いろんな議論ができるのですが、ここは自分の専門に近いし、私もすでにいろいろと書いていますので、ここはさらっといきます。それに、「記憶の抑圧と封印」に関する議論も魅力的でした。これは先ほど注の5)で紹介しました引揚者二世の方々の「在日日本人」という疎

外されたアイデンティティを表現するものと通じているかと思いました。

▲帝国をめぐる人の移動と引揚げ

もう一つ、朴裕河さんがこの本をただ引揚げ文学というものを対象にしているだけではなく、前提としての「帝国をめぐる人の移動」という動きを非常によく理解されていることです。そこが、この本の持っているもう一つの大きなポイントかと思います。

日本近代というのは、明治維新から1970年までの約100年間は人口増加率が1%なんですね。それはものすごい勢いで伸びていますね。その結果この一世紀の間に人口が約3倍になっていきます。人口減少が叫ばれる今日からすると驚きですが、明治維新の頃には3500万人ぐらいだった人口が1937年には7千万人を超え、1970年には1億人になっていきます。

その1億人に急激に増加していく人口を、ヨーロッパの国々はどう見ていたかと。そのような「人口圧」を日本はどう処理していくのかという心配がじつはあったわけです。人口圧によって領土を帝国主義的に拡張していくのではないかとという心配ですね。その心配は的中し、最初は人口増加分は都市移住を中心として、ハワイ移民、アメリカ大陸への移民、南米への移民、アジアへの移民でしたが、20世紀になると、帝国圏への植民というより強い膨張主義になり、最後はアジア・太平洋戦争へと突入したわけです⁷⁾。この人口の急増と人の移動を押さえていることが、朴裕河さんの本のバックグラウンドとしてある、これは非常に大切かと思いますが、そのことをよくわかって書かれてあると感じました。

6. 朴裕河さんへの質問

▲「いま-ここで」という視点

朴裕河さんが「今・ここで」という言葉が使われていますが、この「いま-ここ」から振り返るといふ点について述べます。私は、オーラルヒストリー／ライフストーリーという方法をとっており、聞き取りに基づいて植民地経験を研究しているので、この点へのコメントを最後とします。

植民地経験をインタビューするとき、「いま-ここ」(あるいは、「今・ここで」)で聞き取るわけですね⁸⁾。そうすると、「いま-ここ」から振り返って植民地経験を語るという点がポイントになります。時系列的に見ますと、「いま-ここ」は、「そのとき-そこ」で、あるいは「あのとき-あそこ」では区分されます。つまり、「あのとき-あそこ」での植民地体験や引揚げ体験が、「いま-ここで」語られていきます。その際に、「あのとき-あそこ」での植民地体験というのが、ずっとこの何と申しますか、それは過去の体験として語られていますが、それが、じつは戦後の引揚げた後での生活であるとか、それから現在の生活であるとか、そういうものを経験したことを含ませながら、植民地体験というのは語られていく。その方法論的な視点というのが、朴裕河さんのこの本のなかで、時々ぶれていってような気がします。あるときには、「あのとき-あそこ」の話がある作家が書いている。しかし、別のところでは、特に後藤の場合には、「いま-ここ」から振り返る引揚げ体験に関して書いている。朴裕河さんの本の中で、「いま-ここ」と「あのとき-あそこ」というのが、行ったり来たりしているのではないかと、思いました。

例えば、私たちが方法論的に準拠しているオーラルヒストリー／ライフストーリーから考え

ていくと、オーラルヒストリー／ライフストーリーから見ると歴史というのは「正面の歴史」と言うことも出来ます。正面というのは、歴史を現在の時点からさかのぼって見たときに見える歴史といえますね。通常、一般的な歴史の場合には、「側面の歴史」といいますかね。ずっと、例えば、1930年から1945年というのがどういうふうに動いていったのかということ、その時代を側面から、横から見ている。しかし、オーラルヒストリー／ライフストーリーと同様に、引揚げ文学も、戦後のある時点から植民地時代や引揚げ時代を振り返る。たとえば、1970年の「いま-ここ」からその過去を振り返って書く。つまり、「正面から歴史」を、あるいは引揚げ体験を見ていくんだということだと思います⁹⁾。

この最後のコメントを質問として、朴裕河さんのご本のなかでの方法として見ていくなかで、その何かちょっと揺れがあるような気がしているんですね。それは、意図せざる結果として揺れているのか、あるいは作者に引きずられてそうしているのか、あるいは意図して揺れているのか、です。

例えば、引揚げ体験を「いま-ここ」（という正面）から見ると、「あのとき-あそこ」という側面から見るとでは違っていると思います。作家がどのような書き方をしているのかということによって、その、何といいますが、引揚げ文学自体の持っている意味というのが変わるのか、変わらないのか。歴史的に、あるいは社会的にいうと、このことはとても大きな意味があると考えられます。

それは、このご本のなかでも出てきましたように、「事実」と「現実」と「真実」というふうなものとの関連があるかだと思います。古いモデルで言いますと、歴史学は「事実」を追求し、文学は「真実」を追求し、社会学は「現実」を追求するといった言い方もされてきました。「あのとき-あそこ」というと「事実」性を重視しているのか。「いま-ここ」からとなると、多くの場合は「現実」か「真実」。特に文学ですから、歴史的な事実性というよりも、「その人にとってのリアリティーは何か」、あるいは「真実は何か」というふうな問題に触れているんでしょうか¹⁰⁾。その点の方法論的な関連が朴裕河さんのなかではどうなっているのを、教えていただけるとありがたいです。

むすびにかえてー「引揚げ文学」と戦後社会

最初に戻っていきますと、私自身は、復員兵の子どもであったということで、そのことは、私の人生を強く規定しています。私があることに気づいたのが40歳ぐらいになってからなんです。それで、あまり、自分自身もそういう話はしたくなかったし、できなかったんですね。それはなぜかという、戦後の私たちが受けた反戦平和の教育のなかで、自分が復員兵の子どもであるということは、ある種「後ろめたい」ことであったからです。しかも軍人恩給をもらって大学までやってもらっている。これは、私の人生にとってあまり誇れるようなものではない。ただし、私自身にとっては、父親は絶対的な存在なんです。とにかく恐怖、強い、逃れられない、のでした。多くの子どもにとってもそうですけれども、私にとっては、さらにそれが強烈でした。大学に行って、自由な学風、社会批判の強い学風のなかで、だんだんとそれが相対化されていくことができました。でも、最後に研究していくプロセスのなかで、再び古参兵と

いう体験を引きずりながら生きた戦後の父と出会ったという気がします。

やはり、戦後引揚げの子どもたち、あるいは引揚者二世、引揚げの、この引揚者の子どもたちも、やっぱりそのような体験や想いを持っているんじゃないかと思います。それが、朴裕河さんの『引揚げ文学序論』を手にとることで、そのことを紹介した私の話を聞くことで、私の知人たちも自分の人生というものを、何か別の角度から見直すことが出来たと思いますね。

そういう意味で、朴裕河さんがこの「引揚げ文学」というフレームを出されたことは、日本人にとって引揚げというのは、当たり前のことではあったのですが、知らない人も多くなりましたが、それをフレームとして出してくることで、これまでポーと遠くに見えていたものが、くっきりと、新しいものとして再び「発見」させられたのではないかと思います。

朴裕河さんのこれまでの仕事もそうでしたが、今回もまた日本社会に、東アジア社会に、さらには世界に、新たに見える世界を提示されたのではないのでしょうか。このように、朴裕河さんには、この本からもまた非常に大きなことを教えてもらいました。改めて、心から感謝申し上げます。

ご清聴、ありがとうございました。

注

- 1) その5年後の1989年5月に熊本市で開催された「残留婦人を支援する集会」である中国残留婦人に出会い、彼女の一時帰国先の長野県塩尻市まで押しかけ、丸二日間連続して聞き取り、彼女の生きられたライフストーリーに驚愕しました。この二つの出会いから、私は満洲引揚者や中国残留日本人を研究テーマとするようになりました。
- 2) 社会学の父と呼ばれ、とりわけ秩序論の基礎を築いたデュルケムもまた、普仏戦争後の1894年のドレフュス事件を経験し、それが彼の社会認識に大きな影響を与えたと言われています。中先生はこのことをひきあいに出して、自分も青年期の満洲での体験が自分の社会認識の基底にあることを紹介していました。ドレフュス事件とはユダヤ人大尉のドレフュスがドイツのスパイ嫌疑で軍法会議で有罪になった事件ですが、フランスでは意見を二分する大論争となり、デュルケムはこの事件に関して有名な「個人主義と知識人」(1898)を書いています。
- 3) たとえば、大学そばの喫茶店で話をしている、突然、いきなり彼は興奮して、驚くようなエピソードを話しました。それは作田社一(初代副総長)先生が建国大学を辞めた後に就任した尾高副総長に関する戦後のエピソードでした。その副総長は、ノモンハン事件の生き残りなので、侵攻してきたソ連軍に捕まれば命が危ないと判断して、敗戦直後に朝鮮半島を経由して内地に逃げ帰るのですが、数名の学生たちがそれを助けます。中先生もその一人だったとのことでした。しかし、結局その副総長は戦後早い時期に病死しました。先生は、「彼はあのかとき逃げるのではなく、軍人として自決し、責任をとるべきだった」ということを興奮しながら話され、お互いに驚いたことがありました。普段の物静かな先生からはうかがい知れないことでした。多くの引揚者が、このような思い出せば平静ではいられないようないくつもの経験を、抑圧しながら生きていたのだ、とその時に改めて思い知らされました。
- 4) 2016年11月6日に福岡市にて開催されていた「あれから70年 博多港引揚げを考える」(引揚港・博多を考える会)の連携企画として企画したシンポジウム(博多港引揚げ70周年記念シンポジウム『博多港をめぐる引揚げ・送還を再考するということ』(主催 上智大学・蘭信三))で、「引揚げは何故国民の物語にならなかったか」という質問がありました。それに対して、ヒロシマ・ナガサキは日本の戦争被害という文脈を超えて、人類にとっての反核という理念によって世界的なテーマとなりえたが、引揚げはあくまでもナショナルなテーマでしかなかったし、しかもそれは戦前の植民地支配の帰結としても

たらされた悲劇であり、戦後の反戦平和や植民地支配への反省を主とする言説空間のなかでは、引揚げは国民の物語に昇格するのが難しかった、と答えました。もっとも、冷戦崩壊後に新自由主義的な歴史観が台頭し、21世紀になってSNSという誰もが自由に情報発信ができる時代となり、あの戦争の文脈が脱歴史化される傾向が見えているなかで、「引揚げ」はもう一つの物語として再浮上する可能性はあるかもしれませんが。その点は以下の議論を参照ください。(蘭信三「「特攻による活入れ」という衝撃－「記憶の継承から遺志の継承へ」モデルの批判的検討－」『戦争社会学研究』創刊号、2017年。

- 5) 思春期に引揚げてきたいわば「引揚者二世」を対象とされたことで、本書の成功は約束されたと思います。思春期に植民地からの引揚げを体験したことは、とりわけ植民地生まれの人びとにとっては、引揚げ体験は同時に初めての内地体験でもあり、大人の引揚者以上にそれは大きなインパクトを受ける体験となったと思うからです。たとえば、中国に「留用」されていた父親とともに1953年に引揚げてきたある満洲引揚者二世の一人は、自分たちを「在日日本人」と称し、内地社会への強い違和感を表現していますが、その例からもそれは伺えます。
- 6) 五木寛之「連載 流されゆく日々」第10064回(2016年12月9日)『日刊ゲンダイ』。
- 7) 蘭信三「戦後日本をめぐる人の移動の特質——沖縄と本土の比較から」安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史4社会の境界を生きる人々——戦後日本の縁』岩波書店、2013年。
- 8) 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年。
- 9) もっとも、通常の歴史学においても、野家啓一によれば、言語論的な展開以降、歴史学自体も「側面の歴史」から「正面の歴史」に転換したと言っています。野家啓一『物語の哲学－柳田国男と歴史の発見』(岩波書店、1996年)、野家啓一『歴史を哲学する』(岩波現代文庫、2016年)。なお、「側面の歴史」から「正面の歴史」という概念化に関しては浜日出夫(2007)や野上元(2015)を参照ください。浜日出夫「歴史と記憶」長谷川公一ほか著『社会学』(有斐閣、2007年)、野上元「序論」野上／小林編著(2015)、蘭信三「書評 野上元／小林多寿子編著『歴史と向き合う社会学 資料・表象・経験』」『フォーラム現代社会学』第15号、2016年。
- 10) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年。